



勝又 陽太郎 先生  
Katsumata Yotaro

座談会特別インタビュー

先生、教えて！

大人も感情に左右される生き物

求められるスキルは

「子どもに素直に謝ることができるか」

みなさんこんにちは。新潟県立大学の勝又と申します。夫婦ができるだけストレスなく子育てしていけるよう、誌面をお借りしてアドバイスをさせていただきます。

### 「叱る」という行為について

子育てのなかで「叱った後に後悔する」ことは、パパ・ママともによくあること。子どもの立場にたって考えてみましょう。子どもにとっては「何で叱られているかわからない」状態がいちばん不安です。多くの児童虐待のケースでもそうですが、子どもは自分が怒られた原因がわからないと、「自分が悪いから、こうした状況を招いてしまった」というストーリーを作りがちです。すべてを自分のせいにして背負い込んでしまうんですね。

私は子どもには「自分の責任」と、「自分以外の責任」をしっかりと区別できるようになって欲しいと思っています。

だから、叱るときにはかならずその理由を説明することが重要だと考えていますし、たとえば子どもがママに叱られたあとに「ママはどうして怒ってたんだろうね?」と、その理由について想像力をふくらませながら一緒に考えてみたりもします。パパと子どもと一緒に入るお風呂タイムは、そんなコミュニケーションに最適の場だと思います。そうはいつでも大人だって人間ですから、ときには理由など考えず感情的になって子どもを叱っ

てしまうことがある。

もちろん暴力などは論外ですが、大人とはいっても、感情や気分の波は完璧に制御なんてできないんですね。

そんなときは「さっきはゴメン。あの時はパパがイライラしてて八つ当たりしちゃった」と素直に自分の非を認めて子どもに謝ることも大切です。私も普段そうしてますよ。

もちろん、子どもが小さくて話の内容を理解できなかったり、大人もうまく説明できないこともあるでしょうが、日頃からそうやって言葉を子どもにかけていくことで、親の気持ちの動きや姿勢を子どもに感じてもらうことが大事だと思います。

### 「理想のパパ像」 ……それがプレッシャーに!?

最近は家事や育児に積極的に関わりたいと思うパパも増えてきました。ママたちからはそんなパパの姿勢を歓迎する声がある一方で、余計なことはせずに「カラダを使った男ならではの遊びを子どもに教えてほしい」「家庭内ではどっしりと構えてほしい!」……といった声が聞かれることもあります。実はこうした言葉、家事や育児に積極的に関わろうとするパパの心を折ることもあるんですね。

これらの言葉の多くは「ママや世間が抱く、ステレオタイプの父親像」ではないでしょうか。いまは

多様化の時代。細かな家事が得意な男性だって多いし、夫婦や家族のかたちも様々です。ちょっと極端かもしれませんが、皆さんに考えてほしいのは「明日、パパが突然いなくなるかもしれない——それでも、そう思いますか?」ということ。そうだとしたら、世間一般のイメージで語られる「父親らしさ」よりも、その父親が「どういう人間なのか」を子どもの目にしっかりと焼き付けておきたいとは思いませんか?子どもとのかかわりの中では、「親」としての振る舞いととも、「身近な一人の大人」としての姿も大切にしたいものです。私は「良いパパ気取らないでよ!」とよく妻に叱られますが(笑)、自分たちの子どもにとってパパやママがどうあったらいいのか。それぞれのご家庭であらためて考えてみるのはどうでしょうか。

### 「気持ち」でぶつかることを恐れない

イヤイヤ期の真っただ中のパパ・ママ、お疲れさまです。いつか終わるとはわかっているながらも、大変な毎日かと思えます。なるべく笑いに変換して、乗り越えていきたいですね。

そのためにも、子どもと切り離れた夫婦ふたりの時間を作ることは大事です。「後悔や葛藤」「しつこさをどうやったらいいか」……ママにもいろんな悩みがあると思います。まずは解決を急ぎすぎずじっくりと話を聴きましょう。でも、「イヤイヤ期も成長のひとつ」などという物言いは、正論ではあっても、感情的には受け入れられるものではありませんから、注意してください。

他方で、ママの子育て方法に気になる点を見つけても「これを伝えてしまうと、ママとの関係がギクシャクするかもしれない」と思うことがあります。多くのパパは面倒くさがってスルーしてしま

うんですが、ここは腹をくくって正直な気持ちを伝えることも必要です。ママは、話の内容よりも「覚悟」を見ているんだと思いますよ。

私たちは「家族」が自然につながっているものだと思いますが、「親も他人」「夫婦も他人」、子どもだって「他人」なんです。

「他人」だから、その人の「領域」は大切にしていなければならない。自分の「領域」と相手の「領域」は大きさもカタチも違うものであり、侵されたくない「領域」もある。

でも「他人」だからこそ、どうつながったらいいのかわかるといえないし、何か問題が起きたら、話し合いでしか前には進めない。

子育てで起こりうるさまざまな事象も、そのつど「他人」同士が状況に応じて話し合う。それが唯一の方法だと私は思っているし、そのプロセス自体が本当は面白いのではないのでしょうか。



新潟県立大学・人間生活学部講師  
勝又 陽太郎

教育・臨床心理学のエキスパート。多くの悩みを持つ子どもたちと実際に向き合い、カウンセリングを進めるなかで得られた研究成果を活かし、子育て世代の支援を続ける。自身も5歳の男の子のパパでもある。

### 勝又先生からの「子育てワンポイントアドバイス」

子どもを叱るときには、その理由も説明しながら

悩みを相談されたら、まずは感情に共感すること

夫婦も「他人」ととらえ、話し合いで解決の糸口を



「パパたちの居る座談会」 インタビュアー：はぐみ編集委員(畑澤清志/杉原テルトモ) 文：畑澤清志  
先生教えて! インタビュアー：はぐみ編集委員(畑澤清志/杉原テルトモ)